



森林総合研究所の発足にあたって

九州支所長 橋本 平一

この度、組織再編整備により、10月1日付をもって、これまでの林業試験場は森林総合研究所として発足いたします。これに伴い当支場は九州支所に改称されることになりました。

かえりみますと、林業試験場は明治38年に開設されましたが、九州支場は林政統一を期して昭和22年に設置され、以来今日まで林業、林産業に関する国立試験研究機関として、本・支場体制のもとに研究推進して参りました。しかし、近年、我が国の林業を取りまく情勢は厳しく、この危機的な状況を打開し、さらに森林に対する国民の要請の多様化に対応して、研究機関の活性化と、その役割を効果的に果さなければなりません。このため40年ぶりに組織の改革を行い新体制でスタートすることとなりました。新しい森林総合研究所の全国的配置は次頁に示されるとおりとなります。

九州支所におきましては、従来の育林部造林第1・第2研究室を統合して暖帯林研究室に、保護部菌類研究室を特用林産研究室に改組しました。また改組をみなかった研究室についても研究基本計画の見直しを行い、地域の現状をふまえた研究内容に編成いたしました。さらに、当九州支所は地域研究のセンター的役割を果すこととなり、従来の調査室を連絡調整室に改め地域ニーズの的確な把握、公立試験研究機関との研究分担、連携等の連絡調整機能の強化を図ることを目指しています。新研究基本計画は、地域研究の目標として「地域における林業の発展と森林の多面的利用技術の高度化」を基本方向とし、下記の2つの研究問題、4つの大課題を骨子として編成いたしております。

研究問題：温暖多雨地帯における森林育成管理技術の高度化、大課題1．常緑広葉樹用材林育成技術の確立、2．暖温帯の針葉樹人工林管理技術の向上。

研究問題：九州地域における森林の多目的利用技術の高度化、大課題1．森林の複合的利用技術の開発、2．多雨地帯における水土保全及び環境保全のための森林管理技術の向上。

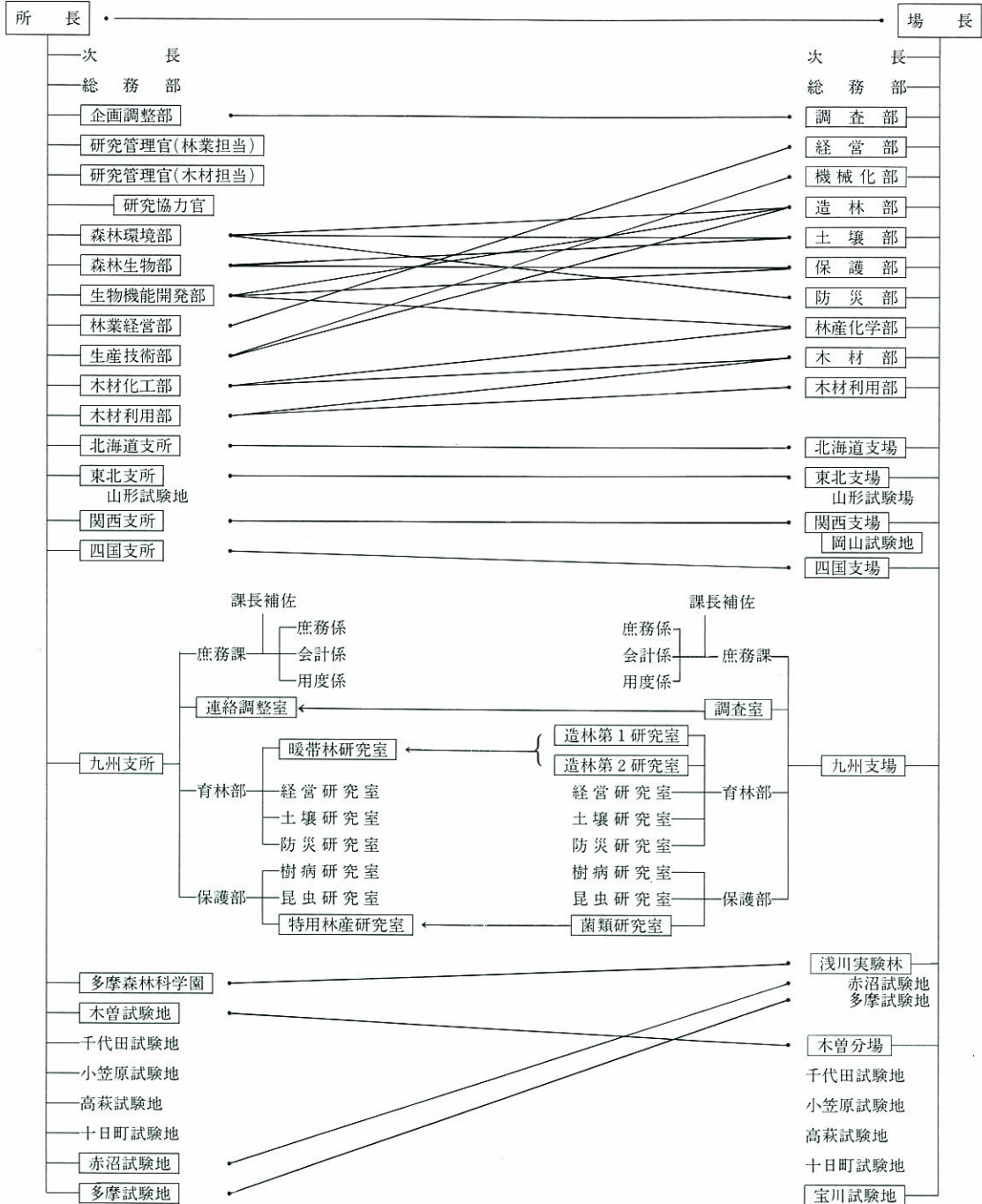
つきましては、地域の皆様、関係各機関との相互の連携を密にして、開かれた研究機関として、ともに発展して参りたいと存じます。これまで当支場によせられた関係各位のご協力、ご支援に対し、ここに改めて厚くお礼申し上げますとともに、今後とも皆様のお力添えを賜りますようお願いいたします。

森林総合研究所新・旧組織対比図

昭和63年10月1日

〔新組織〕
〔森林総合研究所〕

〔旧組織〕
〔林業試験場〕



※ は名称変更及び組織改正を行った部門

暖帯林研究の進め方

暖帯林研究室長 高木哲夫

これまで造林部門の研究は、樹木個体の性質や生理現象など樹木の生理的手法を主とした造林第1研究室と、樹木を集団としてとらえ森林の将来を予測解明する森林生態の研究手法を主とした造林第2研究室とが担当してきた。この度の組織再編整備により両研究室が1つとなった。「暖帯林研究室」として発足することになった。暖帯林という言葉は、九州本土の全域及び四国の一部の森林帯を表わす言葉として、本多(1900)によって初めて使用された。この地域の森林帯を表わす用語として、その他に温帯林、照葉樹林帯、常緑広葉樹林帯等も用いられてきた。これらは研究者によって少しずつニュアンスの違いはあるが、いずれも気候的指標を加味した日本の水平的森林の気候帯区分による用語である。

戦後我が国では、国家的な要請として木材資源拡充のための拡大造林が積極的に推進された。九州地域においても、盛んな人工林造成が行われた結果、膨大な針葉樹人工林が出現し、林業生産の重要な基盤となっている。しかし一方では、かつて当地域に広範に存在していた広葉樹林が大幅に減少してきた。そして近年、森林に対する国民の要請は木材生産のみならず、森林のもつ種々の公益的機能へと多様化している。それに伴い、枯渴しかけた広葉樹林が木材資源の面でもまたその公益的機能の面でも見直されてきている。

このような社会情勢の変化を背景に、暖帯林研究室では、従来の造林研究の蓄積を踏まえ、新時代に沿った森林施業の開発を進める必要がある。そこで、新研究基本計画によって設定さ

れた九州支所の研究課題のもとで当面、次の研究を進めることにしている。

研究問題：温暖多雨地帯における森林育成管理技術の高度化

大課題：常緑広葉樹用材林育成技術の確立

中課題：天然更新と保育技術の開発

中課題：針広混交林の育成技術の向上

大課題：暖温帯の針葉樹人工林管理技術の向上

中課題：スギ・ヒノキ人工林の施業と経営技術の改善

九州地域に分布する常緑広葉樹林は高い生産力を有し、用材生産林としても有望である。しかし、シイ林については用材林施業技術がある程度解明されてきたものの、その他の常緑広葉樹については薪炭林施業技術の段階にとどまっている。今後は、常緑広葉樹林(シイ、カシ類)を対象に森林の遷移過程を明らかにし、その更新と保育技術を開発する。また、針広混交林については、スギ・ヒノキ等の針葉樹人工林内へ常緑広葉樹を導入し、環境と林地保全機能の維持を図るとともに、良質材生産を指向した育成技術を開発する。

針葉樹人工林の施業に関しては、スギ林では凍害研究成果を踏まえ造林初期の凍害回避技術の確立を図る。また、ヒノキ林ではさし木造林木、実生造林木の形質特性を調べ良質材施業技術の向上を目指す。

この他常緑広葉樹に関する特別研究等で、森林資源のバイオマス利用(コジイ、アカシアモリシマ)、主要マメ科樹木の生理機能と育苗技術(マメ科アカシア類)を担当し、積極的な研究推進を行う。

特用林産研究の進め方

特用林産研究室長 谷 口 實

林業試験場は組織の再編整備により、10月1日、「森林総合研究所」として新しく発足し、当支場も支所と名称が改正され、地域林業研究の総合化、体系化を目指してスタートすることとなった。また当保護部の菌類研究室も宮崎分場時代からの長い歴史を閉じ、特用林産研究室と名称が変更されることになり、山村の活性化、森林利用の多様化という九州地域社会の特性に応えるために、従来のシイタケ等食用きのこ類の生産技術の向上に関する研究から野生食用きのこ類、さらに特用樹を含む特用林産物を対象とし、研究の範囲を拡げる方針が打ち出された。

特用林産物は、シイタケ、ナメコ、ヒラタケなどのきのこ類をはじめ、クリ、クルミなどの樹実類、ウルシ、松ヤニなどの樹脂類、ハゼの実から搾油される木ろうなどの林産油脂類、ワラビ、ゼンマイなどの山菜、キハダ、オウレンなどの薬用植物、あるいは竹、キリなどの特用樹、シュロ、アベマキ樹皮など、その種類、品目数は極めて多く、地方的な特産物を含めれば数10品目にもおよんでいる。近年、その生産は食生活の多様化に伴って需要が増大し、食用きのこ類を中心に農山村地域の重要な産業として地域の活性化に大きな役割を果している。このように山村の活性化のために特用林産物の活用が重視されつつあるが、とくに、付加価値の高いものが望まれている。

特用林産研究は上記の特用林産物に関して、それらの生理・生態的性質および生産などの研究開発を進めることであるが、対象作目が多彩であり解明すべき点が多い。

特用林産研究室では、野生食用きのこ類を中

心に、九州地域の特性に適した特用林産物の生産技術の向上を図るとともに、重要な作目として定着しているシイタケの生産を阻害する病虫害の防除法の開発を進める。また、キリ・竹類等特用林産物の生産技術の向上を図るために実態調査と研究情報の収集に努める。

参考のため当研究室の新研究基本計画(案)の課題名を掲げると次のとおりである。

研究問題：九州地域における森林の多目的利用技術の高度化

大課題：森林の複合的利用技術の開発

中課題：(1)特用林産物の生産技術の向上

小課題：①野生きのこ類の調査と発生環境の解明

②暖地に適した食用きのこ類の系統収集と培養特性の解明

③暖地に適した食用きのこ類の子実体形成条件に関する系統別特性の比較解明

④キリ・竹類等特用林産研究の情報収集

中課題：(2)シイタケほた木の病虫害防除法の開発

小課題：①黒腐病の発生機構の解明

②黒腐病の防除

③ニマイガワキン菌及びシトネタケ菌の生理・生態的性質の解明

④ニマイガワキン菌及びシトネタケ菌の防除

⑤クロコブタケ菌の生理・生態的性質の解明

⑥クロコブタケ菌の防除

昭和63年度病虫獣害発生速報

九州地域での森林病虫獣害発生情報を九州支場で集約する方法が前年度から始まったので、このシステムと支場で得た情報を集約し、お知らせすることとした。今年度はこの号の発行が10月となったので必ずしも速報の役割を果たしていないが、今後、より利用価値の高いものにして行きたいので、皆様方の情報収集への協力をお願いしたい。

今年度8月までは九州全域にわたるような突発性の病虫獣害は報告されていない。

病害：ケヤキの苗木に著しい早期落葉を起こす病気についての相談が相次いで寄せられた。菌の分離結果等から本病は *Sphaceloma zelkoveae* KUROSAWA et KATSUKI によるとうそう病と同定された。本病は雨滴などにより病原菌の胞子形成が促され、伝染拡大することから、防除には降雨後のペノミル剤（ベンレート水和剤）の2000倍液の散布が有効であろう。

虫害：ヒノキカワモグリガとスギザイノタマバエの2種の害虫は慢性的に被害を与えている。

支場周辺の観察のみでは、クヌギカレハガの食害が例年より多いようである。（写真—上）。

スギの幼木の枯れが数件あった。凍害が主な原因であるが、コウモリガ類による地際韌皮部のリング状の食害もみられた。同様の症状があれば支場に一報ください。

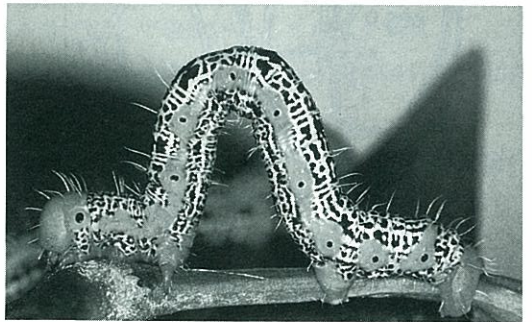
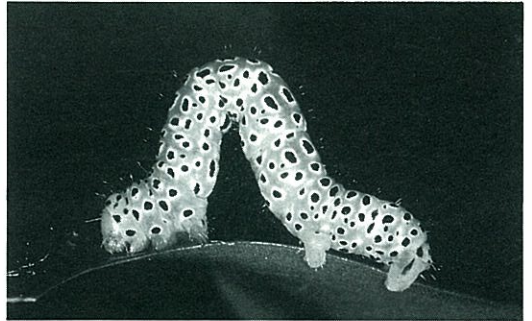
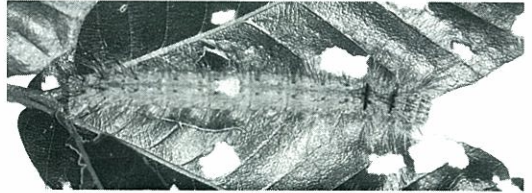
シキミの葉を食害するクロフオオシロエダシヤクが報告された。終齢幼虫は体長が3~4cm、体は黄緑色の地で白の縁どりのある黒の斑点があり、細い毛をわずかに装う。頭部と脚は黄橙色である（写真—中）。年2回発生で幼虫は5-6、8-9月の2回現われる。シキミは最近造林が増えてきている広葉樹種なので、この種による被害が増えるものとみられる。

奄美・沖縄県各島でキオビエダシヤクの被害が続いている。過去に九州本島の鹿児島県、宮崎県で発生したことがあるので、この地域のイヌマキでも注意をしてください（写真—下）。

ヒノキの樹幹にはいりこれを枯らすマスダクロホシタマムシ、各種広葉樹の葉を食害するアメリカシロヒトリ、ツゲの新芽にはいるツゲノメイガ、トラノキの随部を食害するセンノカミキリが報告されている。松くい虫によるマツ類の枯れは広範囲に報告がある。

昆虫研究室 吉田成章

樹病研究室 楠木 学



上：クヌギカレハ幼虫、中：クロフオオシロエダシヤク幼虫、下：キオビエダシヤク幼虫

研究発表会のお知らせ

10月8日「木の日」に合わせて、研究発表会を実施していますが、今年度は日時の都合により10月7日に、下記のように研究発表会を開催しますので、多数のご来場をお待ちしております。

開催日 昭和63年10月7日（金） 13：00～16：00

場所 熊本共済会館「五峯閣」（熊本市千葉城町3番31号）

TEL (096) 355-0121

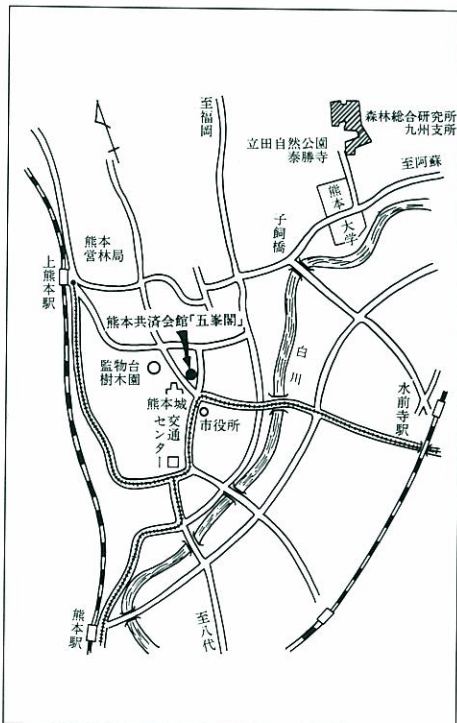
演 題

		司 会 保護部長	
1. スギザイノタマバエの生態と被害	昆虫 研究室 大河内 勇		13:20～14:00
2. スギザイノタマバエの発生環境と林内環境の改善	暖帯林研究室 上中作次郎		14:00～14:30
質疑応答			14:30～14:45
休 憩			14:45～15:00
		司 会 育林部長	
3. 九州のスギ・ヒノキ林における林況診断法	経営 研究室 森田 栄一		15:00～15:30
質疑応答			15:30～15:40

—お 知 ら せ—

諸会議の開催について

- 九州地区林業試験研究機関協議会(秋期)場所長会議
日時：10月19日～20日 場所：九州支所会議室
主な議題：国庫補助関連課題、並びに協議会当年度の事業について。その他ブロック会議での議題等について。
- 林業研究開発推進九州ブロック会議
日時：11月9日 10時～17時
場所：熊本共済会館「五峯閣」



九州の森と林業 No.5 昭和63年10月1日
編 集 農林水産省 林野庁
森林総合研究所 九州支所
熊本市黒髪4丁目11番16号
電話 (096) 343-3168